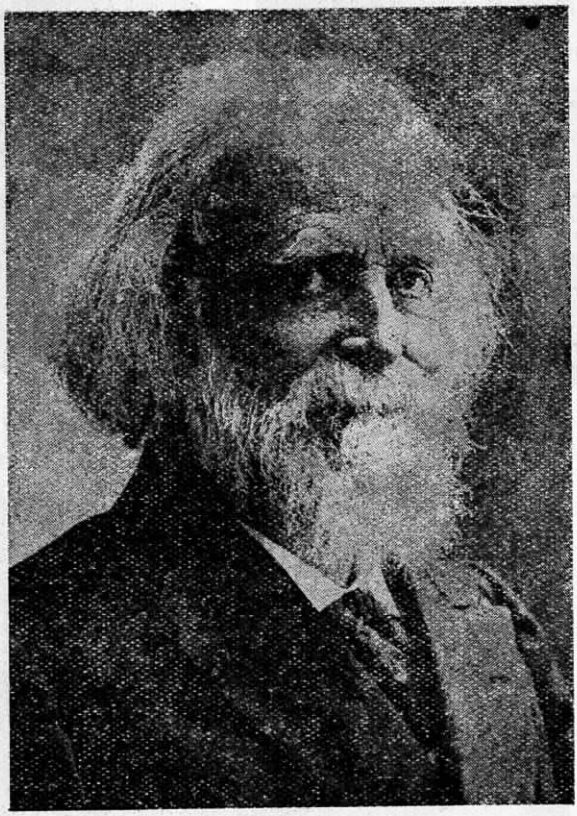
無政府主義の大成

エリゼ・ルクリュ

生涯と思想

石川三四郎著

國民科學社刊



エリゼ・ルクリュ肖像（七十歳）

五十歳頃のエリゼ・ルクリュ

兄　エリイ・ルクリュ

ポール・ルクリュ夫妻と著者石川
(1914年10月)

序　文

エリゼ・ルクリュを傳することは、私の喜びでもあるが、また内心苦痛でもある。というのは、エリゼ自身多くの人の囑望に係わらず、「自傳など書けない」とて筆を執ろうとしなかつたし、その相續者ポール・ルクリュがまた、「エリゼ自身が書かなかつたものを、私が書く譯には行かない」とて他の希望をしりぞけた。そのポールの弟子格である私が、この冒險を敢てするのであるから、私の内心が平かでないのは當然だ。けれども西歐から遠く離れた、人情風俗の非常に異つた日本の社會に、この異色ある人物を紹介することは、また言い知れぬ喜びでもある。ルクリュ一族に對しては冒瀆であるかも知れないが、日本に對しては勳功であるとも言えよう。

私は最初の滯歐八年間の内、七年間はルクリュ家の家族となつて勞働と學究とに指導を受け、次で大正十二年、ルクリュの『地理學研究所』の圖書全部を日本に持つて來た。しかるに不幸にして、その六萬卷の書はなお深川の倉庫にありし間に、かの關東大震災のために烏有に歸して了つた。この大災禍をフランスのルクリュ家に報じてやると、ポール氏は『噴火山の讃美者であつ

たエリゼの片見が震災で燒けたとはいかにもふさわしい成行ではないか！』という返辭をよこした。

こうした間柄であるから、私がルクリュ傳を書くとなると、どうしても頌めすぎたり、我田引水になつたりするであろう。そう考えて、私は努めて我意を挿入することを避けた。そして他の人の感想や、ルクリュ自身の言葉を成るべく多く引用して、讀者をして自らルクリュという人物の全貌を想像し、感得し、諒解せしめるように用意した。そのために或は些か廻わりくどい所があるかも知れないが、しかし、ルクリュの行動と言葉と腹とを透視しようとする讀者のためにはこの準備が必要だと私は考える。

エリゼはバクニンの親友であつたジャコヴスキイがユトピヤの熱心な追究者であることを紹介するに當つて、「ユトピヤこそ現實そのものだ」と言つているが、自分でもユトピヤ鄕建設の志望を懷いて隨分努力し、一生涯その志を棄てなかつたらしい。社會革新の必須條件としてユトピヤ的建設の重要性を認める思想がこの頃ようやく盛んになりつつある時、彼がその文筆的勞作に追われて、理想鄕建設の志望を達成しなかつたことはいかにも惜しまれるが、彼の意圖こそは眞に科學的であつたと言えるであろう。なぜなら、一つの原理からその應用に到達するには、先ず

實驗を重ねることが科學の方式だからである。故に社會革命の科學的方式としてはユトピヤこそ現實問題なのである。ルクリュ傳を世に送るに當り、この一言を附加して置く所以である。

昭和二十二年十一月十一日

不盡草房孤燈の下に於て

石川三四郎識

エリゼ・ルクリュ　目次

序文……一
一、人物……一
二、社會狀勢……三
三、父母……一九
四、社會思想・伯林留學……二七
五、クーデタ・亡命……三七
六、渡米中の生活……四七
七、北米奴隷解放への寄與……六七
八、結婚・旅行・觀察……七二
九、最初の大作……八三

一〇、インタナショナルとパリ・コンミュン……八八
一一、軍法會議の被告となる……九七
一二、世界新地理學の大成……一〇八
一三、爆彈事件・新大學創立……一一七
一四、最後の傑作……一二〇
一五、彼の死……一三五
一六、學者としてのルクリュ兄弟……一三八
一七、菜食主義者……一四六
一八、プルウドンとルクリュ……一五一
一九、ヘルツェン、バクニン、クロポトキン……一六二
二〇、最初の無政府主義的演説……一七〇
二一、人生觀……一八一

二二、投票は墮落の助成……一九一
二三、革命の歴史的原則……一九六
二四、歴史のリズム……二〇〇
二五、美の革命……二一〇
二六、個人及び個人主義……二一五
二七、君主制及び共和制の起源……二一九
二八、泥棒と勞働……二二六
二九、エリゼ・ルクリュと暴力問題……二三〇
三〇、著作年表……二四一

——目次終り——